

2024年3月10日 説教「生き返った青年」

使徒の働き 20章 1~12節

エペソにおける騒動は銀細工人デメテリオのアジテーションに始まりましたが、町の書記役が、論理的に説得し、人々もようやく解散することになりました。

1. エペソを去り (1~3節)

- ①別れを告げて (1)「騒ぎが治まると、パウロは弟子たちを呼び集めて励まし、別れを告げて、マケドニヤへ向かって出発した。」

騒ぎの最中には外に出ることを、控えていたパウロでしたが、ようやく治まると、早速予定通りに次の宣教地に行く手筈を整えました。エペソの枢要な人々を集め、彼らに牧会的な励ましを与えて、宣教を委ねると伝えたことでしょう。そうして、パウロは3年近くいたエペソを離れるにあたって、弟子たちに別れを告げ、エーゲ海を越えて、反対側のマケドニヤに向かったのです。

- ②マケドニヤ宣教 (2)「そして、その地方を通り、多くの勧めをして兄弟たちを励ましてから、ギリシャに来た。」

パウロはマケドニヤ地域にある諸教会をめぐり、そこに連なる兄弟に御言葉からの勧めをし、激励し、さらに南のギリシャに来ました。

- ③ギリシャ宣教 (3)「パウロはここで三か月を過ごしたが、そこからシリアに向けて船出しようというときに、彼に対するユダヤ人の陰謀があったため、彼はマケドニヤを経て帰ることにした。」

パウロはギリシャの地において宣教と牧会をすること三か月、その地の伝道と教育もしたことです。その後まっすぐに、シリアに向けて船で進もうとしたのですが、パウロの進路を妨害するユダヤ人たちの陰謀がありました。外から見れば、同じユダヤ人に見えても、キリストを信じる者たちと、ユダヤ教のなかにある者たちとは、相容れない状態は続いていました。そこで、パウロは北のマケドニヤに引き返し、そこからシリアの道をとることにしたのです。

2. トロアスで落ち合い (4~8節)

- ①同行した者たち (4-5)「プロの子であるベレヤ人ソパテロ、テサロニケ人アリストアルコとセクンド、デルベ人ガイオ、テモテ、アジア人テキコとトロピモは、パウロに同行していたが、彼らは先発して、トロアスで私たちが待っていた。」

パウロに同行していた、ソパテロ、アリストアルコ、セクンド、ガイオ、テモテ、テキコ、トロピモたちは、パウロたちより先に小アジアの港町トロアスで待っていました。ここに、「私たち」とありますが、パウロと使徒の働きを記したルカがその中にいたことがわかります。

- ②ピリピから船出 (6)「種なしのパンの祝いが過ぎてから、私たちはピリピから船出し、五日かかってトロアスで彼らと落ち合い、そ



こに七日間滞在した。」

種なしのパンの祝いは、出エジプトを記念して、過越しの祭に続いて行なわれました。パウロたちも、それを行ったと思われます。そして、ピリピの港から船でシリアに向かい、5日後に海を隔てて向かい側のアジアの港トロアスに着き、同行者たちと落ち合い、そこに七日間滞在したのです。

- ③トロアスでの働き(7-8)「週の初めの日に、私たちはパンを裂くために集まった。そのときパウロは、翌日出発することにしていたので、人々と語り合い、夜中まで語り続けた。私たちが集まっていた屋上の間には、ともしびがたくさんともしてあった。」

週の初めの日(日曜日)に、パウロたちはパンを裂くために集まった、とありますが、それは聖餐式でした。翌日には出発する予定でしたから、夜に至るまで語り合い、また福音を語りつづけました。集会場としていた家の屋上には、明かり取りとしてのともしびが、こうこうと輝いていました。

3. 生き返りを与えられた主(9~12節)

- ①青年ユテコ(9)「ユテコというひとりの青年が窓のところに腰を掛けていたが、ひどく眠けがさし、パウロの話が長く続くので、とうとう眠り込んでしまって、三階から下に落ちた。抱き起こしてみると、もう死んでいた。」

集会参加者の中に、ユテコという青年がいました。彼は窓に腰かけ、パウロの説教を聞いていました。ところが、眠けが襲い、眠り込み、なんと三階から下に落ちてしまったのです。集会中の事故ですから、皆あわてたことでしょう。降りて行って、ユテコを抱き起こしてみると既に死んでいました。

- ②彼を抱きかかえ(10)「パウロ降りて来て、彼の上に身をかがめ、彼を抱きかかえて、『心配することはない。まだいのちがあります。』と言った。」

パウロも降りて来て、身をかがめて、彼を抱きかかえて言いました。『まだいのちがあります』と言いました。すると、この青年は生き返ったのです。

- ③慰めを得た人々(11~12)「そして、また上がって行き、パンを裂いて食べてから、明け方まで長く話し合っ、それから出発した。人々は生き返った青年を家に連れて行き、ひとかたならず慰められた。」

そして、パウロは何事もなかったかのように、また屋上に行き、パンを裂く式を改めて行い、明け方に至るまで話し合いをし、眠りもせず、出発したのです。人々にしてみれば、生き返った青年を家に連れて行きましたが、一同は大きな慰めを得ました。

《結論》 今朝の聖書箇所から、ユテコという青年が生き返ったという出来事について考えたいと思います。

彼はパウロが語るメッセージを聞こうと熱心だったのです。しかし、パウロの話の最中に眠ってしまい、窓から下に落ち、即死しました。パウロもすぐに下に降りて行き、彼を抱きかかえました。そして、「心配することはない。まだいのちがあります」と告げました。この言葉を、死んでいなかったと見るのかどうかですが、9節で「もう死んでいた」とあり、12節で「生き返った青年」とあることから、パウロを通して、ユテコは死んだのが生き返ったと理解できます。

聖書の中に、生き返ったという出来事は、ラザロの場合があります。ベタニヤのマルタとマリヤの兄弟であるラザロは病気になって死んでしまったのです。その時に、主イエスは言われました。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。」(ヨハネの福音書11:25)。こう述べられた後、ラザロは生き返ったのです。ある人は言うでしょう。イエス・キリストは神なのだから、ありうることもかもしれないが、このユテコの場合は、使徒だとは言え、パウロという人間だから、生き返るなどということがありうるのだろうか考える向きがあるかもしれませんが、しかし、私たちが学んだ旧約の預言者エリヤの働きのなかにも、こんなことがありました。シドンのツアレファテという所にいた女性は経済的に困り、わずかに残っていた一握りの粉と少しの油でパンを作り、息子と二人で分けて食べ死のうのとしていたのです。その時、エリヤはそのわずかなもので、自分のためにパンを作るように伝えたのです。彼女は言われるままにしました。すると、彼女の家のための粉と壺の油はなくならなかったのです。彼らの命を守られました。ところが、それからしばらくの後に、よりもよってこの息子が病気になって死んでしまったのです。エリヤは神に「どうか、この子のいのちを返してください」と祈りました。すると、その息子は生き返ったのです(第一列王記17章)。エリヤも偉大な預言者でしたが、人間でした。いったい何が起きたのでしょうか。

私たちはまず、創世記の天地創造において、主なる神が人間を造り、そこに息を吹込み、命を与えられたということに注目したいのです。しかし、神と透明な関係であった人間は墮落して、その関係を壊してしまいました。イエス・キリストはこの関係を正すために、人間として生まれ、人間の罪の贖いのため十字架にかかって死に、よみがえってくださいました。ここに鍵があります。イエス・キリストがユテコの出来事にもかかわってくださったのです。パウロはその腕となりました。キリストは復活の主です。創造主が与えてくださった命の息を、注ぎこんでくださる主です。エリヤの場合も同じです。イエス・キリストが地上に来られるずっと前の時代ですが、復活の主が働いてくださって、生き返りのみわざをツアレファテの女の息子にしてくださいました。

私たちのうちにも、その信仰に従って、復活の主がこの息を吹き込んでくださいます。喜ばしく生きる出来事を与えてくださいます。月末には受難から復活をも覚えていきますが、この群れも一人一人も復活の主によって、いのちの恵みを吹き込んでいただき、明るく生かしていただけるよう祈っていきましょう。